The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	腎における白血病細胞浸潤の病理組織学的研究
Author(s)	宇野, 凱将
Citation	大阪大学, 1967, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29532
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【16】

氏名・(本籍)	宇野凱将（うのよしまさ）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 1289 号
学位授与の日付	昭和42年10月23日
学位授与の要件	医学研究科病理系 学位規則第5条第1項該当
学位論文名	**腎における白血病細胞浸潤の病理組織学的研究**
論文審査委員	(主査) 教授 岡野 錦弥 (副査) 教授 宮地 徹　教授 石上 重行

論文内容の要旨

〔目　　的〕

当教室においては種々の臓器に於ける白血病浸潤の組織分布の態度に就き組織統計学的方法を用いて客観的に観察し浸潤の方向及び転移性格について考察して来たが，今回私は従来単なる叙述的観察のみに止められていた腎の白血病浸潤を組織構造の別に従って計測しその浸潤度の推移から組織象の意義づけを試みた。

〔方法ならびに成績〕

大阪大学病理学教室に於ける白血病ならびにその類縁疾患69例，内急性骨髄性白血病（AML）17，急性リンパ性白血病（ALL）10，慢性骨髄性白血病（CML）8，側白血芽細胞性白血病（PL）2，慢性リンパ性白血病（CLL）4，単球性白血病（MOL）8，リンパ肉腫（LS）8，細網肉腫（RS）8，ホジキン病（Hd）3，類白血病反応（LR）1，についてその両腎を一方は表面に垂直方向5ケ所，他方は平行に3ケ所を夫々腎盂を含む切片及び腎門組織の切片を作成し同時に腎門又は后腹膜リンパ節のヘマトキシリンエオジン染色標本に就き100˚方眼マイクロメーターを用いて組織統計学的検索を行なった。殊に白血病浸潤が主として血管周囲結合織に強いことより血管種類別に腎組織構造を区別し夫々の浸潤度からそれらの間の有意差を検討した。その結果① AML では腎門及び腎盂葉間動脈周囲部に高く次いで弓状動脈部，小葉間動脈部，糸球体周囲とこの順に低く，髄質は最も低い浸潤度を示した。ALL では腎門，腎盂葉間動脈部，弓状動脈部で高く小葉間動脈部と糸球体周囲とが互に差なくこれに次ぎ，髄質で最も低い。MOL は腎門及び葉間動脈部で最も高く，弓状動脈及び小葉間動脈部がこれに次ぎ糸球体周囲及び髄質で最も低い。CLL では腎門から弓状動脈部，糸球体周囲，髄質よりも高い。LS では腎門より小葉間動脈部に至る迄隣接組織構造間で段階的減少を示し髄質に於て最も低い。RS では組織構造間に差はなかった。②腎浸潤度の左右差は各病種で有意のもの

を認めない。白血病の種類の間では症例による変動を超えて腎浸潤度の差がみられ LS 及び LL 例に強く，次いで RS, AML で，CML には殆んどみられなかった。尚血管内に白血病細胞の存在する率は，AML, MOL に於て殊に高率で，LS に於ても少数認められた。③后腹膜リンパ節と腎浸潤との関係について LS, AML, ALL, MOL の例で腎動脈分岐部の后腹膜リンパ節及び腎門部血管リンパ管組織を連続切片ならびに肉眼的に検索した結果，LS 例に於てはリンパ節周囲浸潤が腎門血管周囲結合織を経て腎盂の血管周囲結合織又は被膜へ連続的に浸潤する像が認められた。これに対し各種白血病例及び LS の内でリンパ節周辺組織への浸潤が軽度の例に於ては腎盂組織の浸潤との間には乖離があり浸潤の連続性は否定されるが完全に腫瘍化したリンパ節の輸入リンパ管に於ては白血病細胞の栓塞があり，これらは逆行性のリンパ行性転移の可能性も推測される。又腎静脈及びその分岐の壁の白血病細胞浸潤が多くの例で認められた。又全身リンパ節の腫大を計測して図示すれば LS 例では一般に后腹膜に塊状腫瘤を来しこれらは腎への連続性浸潤を来すが白血病では同様の部位差は認められるけれども LS の如き顕著なものをみなかった。④腎重量の各年令正常値に対する比と腎浸潤度との相関は有意でなく，又死亡前末梢血中白血球数と腎浸潤度の間にも相関を認めなかった。年令別には5才以下の ALL ならびに LS では腎浸潤度の強いものが極めて高率にみられ，又 ALL では年令の低いもの程浸潤度の強い傾向がみられた。尚尿沈渣に白血球多数であった症例で組織学的にも尿細管内に白血病細胞のみられた例が AML に1例ありその他病理組織的にのみ尿細管にみられたものに AML 1例，CML に1例あった。

〔総　　括〕

(1)腎の白血病浸潤は LS 及び ALL に最も高度で次いで CLL, MOL, 更に AML に於て低いことが推計学的に確かめられ CML では浸潤は極めて軽度であった。腎の白血病浸潤は一般に腎門ならびに腎盂に強く弓状動脈部，小葉間動脈部，糸球体周囲の順に減少し所謂浸潤傾斜を示す事も確かめられた。又浸潤は一般に髄質に於て最も低い。(2) LS では后腹膜の塊状腫瘤から疎性結合織を経て腎盂血管周囲より更に実質内に入り糸球体周囲部淋巴間隙に連続性に浸潤するものと考える。白血病例では不連続な血行性転移の他に数例ではリンパ行性の逆行性転移が認められた。(3)年令的に ALL 及び LS は5才以下の乳幼児に於ては腎浸潤が極めて高度のものが多く，ALL は若年者高度である。(4)腎重量の各年令正常値に対する比と腎浸潤度とは必ずしも相関しない。

論文の審査の結果要旨

年来全身諸臓器に於ける白血病浸潤を組織統計学的方法を用いて客観的に観察し浸潤態度を考察し来ったが今回著者は従来単なる叙述的観察のみに止められていた腎の白血病浸潤を組織構造の別に従い所謂浸潤度を計測し客観的浸潤態度を追求し病型による浸潤特性を見出し且つ全身殊に後腹膜リンパ節との関連を明らかにして浸潤形式乃至転移性格を検証した。